実践流交
中学国語

論理的思考力・表現力およびPISA型読解力の向上を図る指導法の工夫
～文学的文章・説明的文章を題材にしたディベートの取り組みを通して～

東京都立両国高等学校附属中学校　渡辺　雅美

はじめに

本校は、都立高校改革推進計画において、併設型中高一貫教育校として平成18年4月に開校した。開校にあたり、論理的に思考し適切に表現する上で国語力は必要であるという考え方に立脚し、「国語力の向上」を最優先課題として掲げた。

国語力の中でも「論理的に考えて話すこと・聞くこと」「論理的な文章を書くこと」は現行学習指導要領はもちろんのこと、21年度より施行の新学習指導要領では、より大きく扱われることとなった。ということは日本人が国際社会に進出していく上で、それだけ「論理的に話す・聞く」が重要視されているということである。この取り組みはその意味で先進的であったといえる。

ディベートの指導計画と実践

【指導のねらい】

1. 論理的思考力・表現力の向上
2. PISA型読解力の向上
3. コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力の育成

【全体指導計画と留意点】

1. 中学校課程3年間で8か月毎に4回実施する。（『話す・聞く』領域年間指導総時間数18時間のうち4時間程度を1回のディベート授業に充てる。）
2. 公教育・教科の特性から、中学1・2年生で社会問題を扱うことは避け、教科書学習材の文学的文章及び説明的文章に論題を求めたディベートという形式をとる。
3. 指導のねらいや学習材に応じて、教科横断的なディベートを行う。（例．反駁部分英語）
4. 生活班対抗で討論できるようにオリジナルフォーマット（形式）を用いる。
肯定側立論（3分）→否定側立論（3分）→否定側反駁（2分）→肯定側反駁（2分）→否定側最終弁論（3分）→肯定側最終弁論（3分）各回作戦タイム有り
5. 各単元10時間設定で6時間を読解指導に、4時間をディベート準備と発表に充当。
6. 当該教材から論題を3つ、生徒に設定させ、それぞれ肯定側否定側（是非）を各班毎に選択し、生活班6班で対戦し、必ず全員が発表する。
7. 二〇〇字～二〇〇〇字の課題作文を書く練習を、1年次から計画的に行い、発表原稿として四〇〇字が1分程度と体得させておく。
8. 言語活動は必ずビデオで記録し、評価や授業改善に用いる。生徒も成果と課題を確認する。

【指導の実際】

読解後、生徒は立場や担当の確認が済むとすぐに準備に入る。事前に作品自体は丹念に読んでいるが、論拠を他の作品や作家論に求める場合が多いので、書籍・ネット等を用い

て調べ学習後原稿を書く。原稿を何度も書き直し、矛盾点がないか確認し、データをそろえて相手側の反駁に備える。また、提示資料やフラッシュカードも競技ディベートでは使用できないが、授業では毎回作成を許可した。これらの作業は、ほとんど家庭学習や放課後、早朝などに行い、シミュレーションを経て本番となる。

ジャッジは評価カードを用い、内容と表現力をそれぞれのパートでつけ30点満点にして、公平に行う。フロアのジャッジは評価カードに従って、肯定側が高得点であれば青いカードを否定側が高得点であれば赤いカードをあげる。

1年生の6月に行った『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ）は、初めてのディベートで、原稿はよくまとまっていたが、論拠の範囲は教科書内にとどまり、下を向いて原稿を読んでいるのが見て取れる。

論題A：主人公にとって「少年の日の思い出」はあった方がよい・よくない／論題B：エーミールは模範少年である・ない／論題C：最後に主人公が蝶をつぶしたのは事件を忘れるためである・ない

1年生の3月には、『走れメロス』『RUN MEROTH　RUN』（太宰治）で行った。英語科との合併検証授業で、反駁は英語で、論拠も作家論や「熱海事件」に求めるようになった。

論題A：メロスは真の勇者である／論題B：セリヌンティウスは重要な人物である／論題C：作者はディオニス王に自身を投影している

2年生10月には魯迅の『故郷』をテーマにしたディベートを行った。生徒の中には『狂人日記』を丹念に読み「まだ、人を食った事のない子どもならあるいは救えるかも知れぬ。子どもを救え。」と、「魯迅の示す希望と対極にある希望」を堂々と論じた。

論題A：宏児と水生は、迅と閏土と同じ道を歩む／論題B：灰の中に椀や皿を埋めたのは閏土である／論題C：希望とはもともとあるものと言える

4回目は中学3年の6月に、鷲田清一の評論文をもとに、初めて社会的な論題を扱った。視聴覚機器も許可したので、正統派ディベートではないとはいえプレゼンテーションとして大変興味深い対戦となった。

『寂しい時代と聴く力』（鷲田清一）より

論題A：現代において、より重要であるのは話すことであるか聴くことであるか／論題B：小中学生の恋愛は必要である／論題C：小中学生の携帯電話所持は必要である

成果

ディベート授業を行ったことで、文学的文章の主題へアプローチ・客観的事実に基づいた論拠の有効性の認識・論理的思考力や表現力の育成・コミュニケーション能力の育成・他者の意見を受容・考え方の多様性を認識するために大きな有効性が認められた。生徒は高い意欲を保持し、基礎学力・論理的思考力・プレゼンテーション能力も飛躍的に向上した。ディベートで毎回生徒に大切にするように言ってきたことは「論拠のある内容」と「パブリック・スピーキング」であり、いつも準備期間は僅かだが膨大なエネルギーを費やす。生徒は立論を構築するために百種類以上の書籍やデータにあたり、再構築に一万字以上の文章を苦しんで書いた。そして、プランとして美しい文章を構築できたとき、生徒自身も立論（プラン）の構築が、自分自身の将来の夢の構築であると学んだのである。

わたなべ　まさみ　昭和61年より東京都公立中学校に勤務。平成6年度より文学教材に論題を求めた教室ディベートに取り組む。平成17年都立中高一貫校開設準備室勤務となりカリキュラム編成に携わり、平成18年開校後一期生の担任として国語指導にあたる。